

命令表現内における文法構造の役割分担

——日本語形容詞の連用修飾用法を中心に

大 瀧 幸 子

1. はじめに

発話場面の状況を変化させるために日本語の形容詞を使って「命令の表現意図」を表す場合、形容詞だけでは十分な伝達機能が発揮できず、動詞との統合を行う必要がある。本稿では動詞が代動詞「する（命令活用形：シロ）」の場合とそうでない場合とを分け、それぞれの統合型の統合特徴及びその誘導する現象素操作を分析する。最終的には、中国語の3種類の文法構造（Ⅰ「述語結果補語構造」Ⅱ「様態補語構造」Ⅲ「連用修飾語構造」）を命令表現として用いる場合に、どのような相補分布を示すかの検討を通し、それぞれの統合意義特徴と命令の表現意図との共起関係を記述することを目的とする。

なお、本稿は金沢大学文学部紀要言語文学篇第54号「中国語命令表現内における文法構造の役割分担—日本語の動詞—語文と比較した場合」（以下、前稿と呼ぶ）の続編である。

2. 静的形式体系としての意義素論と動的行為体系としての現象素論

形容詞を用いた命令表現形式の分析にはいる前に、まず、本稿における意義素論と現象素論の不可分な相関関係、すなわち意義素論の扱う言語形式の文法機能と、現象素論が扱う言語形式の運用との相関関係を説明する。

【1】意義素論によれば、統合型はその二項を充当する単語の意義素を呼応させ、新たな一つの統合意義を表示するものである。しかし、その統合

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

意義を新たに構成するための文法に基づいた表現行為（言い換えると、その統合型の統合意義特徴に基づき、二つの意義素を一つに組織する行為）は「個々の言語形式の語義を静的かつ体系的に記述する語義的意義特徴」では、そのプロセスを記述することができない。本稿は前稿での考え方をより明確にし、統合型の統合意義特徴は、「二つの意義素が想起させる現象素を操作する一定の方法（現象素操作）を誘導する」と規定する。

前稿では次のような現象素操作を認めた。

【最小統合型（二項のみで構成）の現象素枠表記原則】

統合型のなかで表現される自立語のどちらが焦点となりうる情報を想起するかをマークする。焦点となる情報はもう一方の情報をその内部に包含するものとし、非焦点情報にとって焦点情報はズームイン先となり、非焦点情報はその現象素域へズームインしていくものとする。

【2】意義素と、意義素が想起する現象素に対する現象素操作との関係は、モジュールとその運用という直接的関係ではない。現象素操作は、モジュールとしての複数の意義素が実際の発話に用いられる場合に誘導する複数の現象素によって、あらたな現象素枠を構成するための操作である。

●語義的意義特徴＝現象素内の一定の情報を想起する。

情報と語義的意義特徴との違いは、現象素内の情報には「発話の文脈或いは場面と関連づけられた関連情報（文脈的語義特徴など）¹」が表現水準ごとに加わっていく点にある。²

●弁別的特徴　＝語義的意義特徴・統合特徴・構文特徴それぞれの静的体系内において、各形式を特定する役割を果たす「典型的特徴」。

そのすべてが情報として想起されるとは限らず、「事象の周辺性」は典型的特徴が情報を想起する割合によって決定される。

●示差的特徴　＝発話時点において、話し手が同じ伝達内容を表示できると判断したく入れ替え可能の複数の類義形式の間で、各形式を区別する役割を果たす特徴

示差的特徴のうち典型的なものは言語絵形式の静的体系内の位置づけを決定する役割を果たす。しかし、周辺のなものは一般に発話文脈・発話

命令表現内における文法構造の役割分担

場面からの関連情報によって選択される。

●文法的意義特徴（意義素内）

(1) 意義素内の語義的意義特徴を組織する意味的事項において、格または格的要素を要求する単語すなわち形容詞・動詞：

その想起させる現象素内の情報構造として、他の現象素と関連つける位置（認知焦点）を、不定人称者の視点³で決定する役割を果たす（前稿）。また、認知焦点に受け入れる単語（または連語）の言語形式を制限する。

(2) 意味的事項において格または格的要素を要求しない単語の場合：意味的事項により語義的意義特徴が組織化されている単語（名詞）では、ズームインしていく先の現象素を想起する。語義的意義特徴が組織化されていない単語（いわゆる文法語、虚辞）は最小統合型で組み合わせさったもう一項の単語の現象素が、上位統合型で結びつけられる単語の現象素内へズームインしていく位置を決定する。

【3】:【1】を意義素論の立場で表現しなおすならば、最小統合型が担う文法的意義特徴（すなわち統合意義特徴）は、「不定人称者が認定した意義素」に対して、「その統合型の視点（前稿：第一人称者の視点）によって二つの意義素を選択し、二項として関係つける方法」を決定する。二項として関係つける方法（統合意義特徴）は2種類各2パターンに分かれる。第1種；格の補填関係について

(1-1) 前項後項の一方が意義素内意味的事項の格の補填を要求する。

(1-2) 前項後項のいずれも格の充足を要求しない。一方の項が他方の項に対して「属性または様態」等の意義特徴を一時的に挿入する。

第2種；補填関係の完成規模について

(2-1) 格または格的要素の補填関係を当該統合型で完成する。

(2-2) 統合型群を構成することで一つの充足関係を完成する。⁴

統合型群は「複数の最小統合型が重複することにより、はじめて一つの統合意義特徴を表示する」言語形式のことである。（成立要件は後述）

統合意義特徴は単一の言語形式に帰属する意義ではなく、＜複数の言語形式を配列する方法＞（統合型：これも「言語形式」の一つとみなせる）

によって表示される意義であるが、他の言語形式と同様、静的体系を構成し典型的・周辺的の区別をつけることができる。⁵ 一方、統合型の統合意義特徴によって誘導される現象素操作は動的なものであり、本稿は統合意義特徴と現象素操作との間に以下の対応関係を認める。上記、2種2パターン⁶の統合意義特徴ごとに対応関係を述べる。

(1-1) 前景現象素と背景現象素が決定される。⁶

「第一人称者の視点から格の補填を要求する意義素」が想起する現象素のほうが、もう一方の現象素のズームイン操作の着地点となる。このとき、その現象素は現象素枠化して有限の現象素枠域内で情報の充実を得るものとして「前景現象素」と呼ぶ。

一方、ズームイン操作でもう一方の現象素内認知焦点⁷へ移動させられる現象素は、新しく成立した現象素枠内における「背景現象素」と呼ぶ。

(1-2) 現象素の重複を生じ、あらたな現象素焦点をつくる。⁸

名詞の意義素は意味的事項として格を要求しないため、本来は認知焦点を現象素内に有していない。しかし修飾統合型の被修飾語項を補填する場合、修飾語項を補填した他の現象素(枠)をズームインさせ、新たな名詞現象素枠になることがある。名詞現象素枠のなかでは名詞がこれまで想起していた情報が前景となり、ズームインしてきた他の言語形式の現象素が背景となり、現象素域の重複した「多重相の現象素焦点⁹」が形成されるものとする。

同じ形容詞と同じ名詞の組み合わせで「主述統合型と修飾統合型」を構成する場合、前者は名詞現象素が形容詞現象素の認知焦点(判断対象など主語の位置を要求する格が想起する)へズームインして形容詞現象素枠が成立し、後者では名詞現象素のなかへ形容詞現象素がズームインして名詞現象素焦点が成立する。日本語でも中国語でも、主述統合型における共起制限のほうが、修飾統合型の共起制限よりも緩やかであり、この言語事実は自然言語に普遍的なものと予想される。この理由を現象素論の立場で考察するならば、主述統合型では名詞現象素が述語となる形容詞現象素へズームインする先が認知焦点という有限の枠によって区切られ、形容詞現象

命令表現内における文法構造の役割分担

素の情報と呼応しあう情報が少なくて済むため、と説明できる。¹⁰

(2-1) 認知焦点をズームイン先とする現象素操作と対応する。

動作動詞の現象素が前景現象素となり現象素枠の外枠を決定する場合、現象素操作は「一回性動作の出来事としての構造」(第一人称者表現水準)を補填することに留まる。即ち、動詞の意義素が表示するアクションツァルトの三分節の構成「平相・流相・異相」にどのような認知焦点があるかを判断し、その認知焦点に要求されている情報を補填する操作である。¹¹

現象素内の情報構成は一見、認知言語学での action chain の図解に相似したものになるが、時間の経過に伴う関係拡張とは関わらず、因果関係を基にした理想認知モデル causal chain と異なるものである。¹²

(2-2) 複数の現象素枠を背景としてズームイン(または対等の連結)して、前景現象素枠内でのすべての認知焦点や現象素焦点を充足する操作と対応する¹³

以上、解説に重複するところもあるが、「意義素論における静的語彙体系が同様に静的な統合型体系のなかで用いられる方式」を、第一人称者による「現象素を動的に操作する方法」として記述する方針を述べた。

以下、さらに上位の表現水準として、<表現意図の単位>としての構文(群)を構成する「表現者水準」、<伝達意図の単位>として発話文(群)の意味を「話し手が聞き手の解釈能力を推定した結果」を考慮しつつ構成する「発話者水準」について説明をすすめる。

3. 言語形式の4つの表現水準

3. 1 言語形式の意味の抽象化

本稿で述べてきた言語形式の「意味の静的体系」は、通常、人が言語を習得していく過程(動的体系を有する)に沿って構築されていくものとして想定してある。発話場面の状況や、そこで交わされた多くの言葉の文脈から感受した無尽蔵ともいえる情報の中から、「音声による伝達を行おうとする時に繰り返し意識され、捨象されることなく残った情報」が「特定

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

の言語形式（音声とその配列）」を喚起するようになって、はじめて特定の言語形式がある特定の現象素（枠）を想起できると、本稿では考える。すなわち、個々の言語形式の意味は、服部四郎 1968¹⁴で指摘されている「発話意味から単語意義素への抽象過程」をたどり成立するものであり、本稿の現象素論を併用する表現をとるならば、言語形式は「多くの情報を、さまざまな伝達目標を達成しやすい方向へ捨象していった結果、成立した意味体系（構文のネットワークを含む）」（学習者の視点）を表示する形式として存在する。

しかし、繰り返しを厭わず指摘するが、言語形式と意味の静的対応関係のあり方は、第一人称者レベルと不定人称者レベルで＜個人にとり社会的慣習として固定されていると意識されている＞表現水準である。

本稿では、研究者が言語形式に対して意味分析を加えようとする場合は、「伝達意図が達成された」と発話者が意識した区切り、すなわち伝達機能が一段落する区切り（「発話文」または「発話文群」と名づける）」という「体系化されないままに、個別にかつ一時的に成立する単位」について意味分析を行うべきだと考える。すなわち、話し手が既に学習し終えている不定人称者第一人称者の表現水準における意味を、発話者や表現者（後述）としてどのように使用しているか、という視点にたって分析を加えるべきだと考える。その主な理由は二つある。（1）実際には発話文以外に具体的言語形式が存在しえないからであり、先入観を排した科学的分析とは実在するものに対してしか行い得ない以上、意味分析の科学性を保証するためには常に＜言語形式の静的体系を抽出していく出発点＞へ戻ることが肝要だからである。発話文（群）の典型的形式は「前後にながしいポーズが置かれる統合型群」および「話者の交代」によって区切られた言語形式の連鎖として現れる。¹⁵ 発話文（群）は、本稿で設定した表現水準において発話者水準にある分析単位と仮定する。（2）発話文の意味（「伝達内容」と呼ぶ）のなかには、＜話し手が発話行為と同時に進行「聞き手の解釈能力に対する推定」（「能力推定情報」と名づける）＞が、必要不可欠の要素として含まれているものとする。この能力推定情報をもとに、みずからの

命令表現内における文法構造の役割分担

言語形式によって表現する情報量を操作して、もっとも効率のよい表現形式を採択しようとする。人間の行為は何らかの意識的作為が存在しない限り、全て、冗長よりは簡便な方式を選択するからである。

3. 2 発話者水準の特徴

前項で、その存在を指摘した話し手と聞き手とが各々有している解釈と推定の特徴、および伝達内容を聞き手がどのように知ることについては、関係性理論¹⁶が詳しい考察を行っている。関係性理論が（本稿での）発話者の能力について指摘する特徴を、以下、長くなるが引用する。

『ほとんどの語用論者や言語哲学者は、発話の意味は話し手の思考の字義通りの表現、即ちまったく同一のものの再生でなくてはならないという意味で、言語慣習（convention）とか原則（principle）とか前提（presumption）が存在するというを当然のこととしている。この主張は強すぎると思う。人々は四六時中字義通りに考えを述べているわけではないことは確かであるし、字義性の言語慣習とかその種のものが存在するという経験的な根拠はない。そのような言語慣習は純理論的な根拠で仮定されており、伝達の基底にあるコードモデルは、発話は、それがコード化するものを伝達するものとして理解されていることを前提としている。それ故に非字義的用法は、字義性からは離れているが多少ともコード化されているものと分析でき、推論によって復元可能であるとする。《注：本稿は、コードモデルとして不定人称者、第一人称者、表現者の各表現水準を設けるが、発話者水準では字義性以外の情報が伝達内容に含まれることを必須のこととみなし、波線部（大滝の付加）の主張には同意しない。》我々の接近法は異なるものである。我々はコードモデルを排除したので、厳密な文法的制約は別として、場当たりの制約を仮定しなくともどうしたら言語伝達は可能なのか説明したい。コード理論を提唱する人たちは言語伝達を、話し手が思考のひとつを発話の中にコード化し、それをその後聞き手が（最近の理論ではもうひとつ推論という追加の層を設けて）解読

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

することを伴うものとみている。我々は言語伝達を、話し手が自分の思考のひとつの一般的な解釈（波線(1)：大滝の付加）として発話を提示し、聞き手がこの発話、即ち話し手のもともとの思考を心的解釈として構築することを伴うものとみている。発話は話し手の思考の解釈的な表現であり、聞き手は話し手の情報意図について解釈的な想定を立てるとすれば、我々の推論的伝達の一般的な説明から、話し手の思考の解釈的な表現であるということになる。しかし、（中略）解釈がどれほど字義性に近いものかということ、そして特にいつ解釈が字義通りのものになるかは（波線(2)：大滝の付加）、関連性の原則¹⁷に基づいて決められることなのである。』¹⁸

関連性の原則（注 17）を本稿の表現水準を分ける立場に援用できるかどうかを考えてみると、その内容は発話者水準の発話素から表現者水準の構文素へと情報がズームアウトしていくシステムを考察するための基準法則として用いるにふさわしい。

また上記引用文中の波線は、本稿が特に注目する見解である。

波線(1)は言い換えるならば、話し手にとり発話を提示する行為と話し手自身の思考の間には乖離が存在する、という指摘である。一人の言語生活者のなかに表現水準4層にわたる人格と能力を想定する本稿の立場は、細部に拘りいたずらに煩雑を求めるかのように見えるが、筆者にとっては経験的に肯定しうる言語感覚である。第二言語を習得する場合は、表現水準を抽象から具体へと、情報のズームイン能力を高めていく過程に沿って学習がすすむ。まず辞書を引いて単語の意味を調べ、他の単語とどう組み合わせれば意味が通じるだろうかと考え、ある場面に用いるにふさわしい典型的言い回しを単文として暗記する。その後、場数を踏むことで聞き手や発話場面に最もふさわしく自分の発話意図を表現できるようになる。

一方、母語を獲得して行く過程は荒っぽく言うならば、辞書をひくことなく、見聞きする発話のかずかずを通して（発話素から意義素へと）表現水準を具体から抽象へと遡るといった情報のズームアウトを繰り返すことにおいて成立する。先天的言語能力修得の能力は、本稿の立場から言えば、このような「情報の抽象化能力」（自分に関連が深いことに意識が集中す

命令表現内における文法構造の役割分担

る、という関連性理論でいう伝達の原則に基づく)能力と、その結果到達した「概念の長期記憶能力」の2つの要素を必須のものとしている。

また、母語を自由自在に操って伝達意図を的確に表現しようとする場合、話し手の立場から聞き手の理解能力に対する推定をまず行い、聞き手の反応を<追体験>しつつ、次の表現を構成していく。この過程では発話水準にある言語外情報の収集から始まり、表現者として文を言い切るたびに発話意図と叙述内容との整合性を検証して表現意図の調整を図る。そして、調整された表現意図を表すにふさわしい言語形式を構文、統合型、単語を各々の静的体系のなかから選択していく。これもまた、言語形式による伝達行為について経験的に肯定しうるプロセスといえる。そして、本稿では意味研究の方法は、この場合と同様の過程をたどるべきだと主張する。

引用中文の波線(2)は<解釈が字義通りのものになる時>について触れている。関連性理論での<解釈>の位置づけには二通りある¹⁹話し手の思考と発話の命題形式に関わる<解釈>と、話し手の思考とそれが表示するものとの間にある<解釈と描写>である。本稿は前者については発話意図と表現意図の関係にほぼ平行するものと捉え、後者については表現意図と構文との対応関係を分類する基準の一種として考慮する価値がある、と考える。そこで、関連性理論における命令文の定義を、本稿でとりあげる構文「命令構文」の定義と比較して検討することにする。(後述)

3. 3 表現者水準の特徴

本項では関係性理論が指摘していない言語形式の単位、すなわち、表現者水準の特徴、および構文についての仮定を述べる。

発話文の伝達内容は世界で唯一つのものとして存在するにも関わらず、数人の異なった聞き手が同時に同一の発話を聞いた場合や、録音テープなどで記録された発話文を異なる時に異なる聞き手が聞いた場合、大方の発話文の意味(一致した字義)として指摘できる「発話文の区切りに沿って抽象化された意味(叙述内容)」の存在が認められることは経験的事実と

考えられる。

この叙述内容は例えば、同一の発話文に対して異なる理解を示した異なる聞き手（または以前の自分の発話を考え直す話し手）が、発話場面の状況、相手との関係、前後の文脈との繋がりを検討しなおすことによって、おのおのが「最初の理解が間違っていたと判断する論拠」にもなれる。すなわち、〈表現意図の反復推定を可能とする字義（構文）〉が言語形式として存在し、その構文が表示する表現意図を理解しあうことで相互の意見交換をなしうる、という実際の言語生活のあり方が、発話内容よりも抽象化の進んだ叙述内容が実在することを保障していると考えられる。

本稿では、この、「みずからの表現意図を構文を用いて表示し、叙述内容を相手（独り言、書記においては自らも相手とする）に伝達しうる能力」をもつ人格を「表現者」と名づける。そして、発話者水準と表現者水準を区別するとともに、発話者と表現者の能力がともに一人の話し手の発話行為のなかに顕現するものと仮定する。

ここまでの発話についての考察を踏まえて、本稿では、表現者水準における叙述内容が想起する構文素は、発話水準における伝達内容が想起する発話素に含まれていた、（1）発話場面の状況（2）相手との関係（3）前後の文脈との呼応関係の3種類の非言語的情報のうち、同一の言語形式により（字義的）記録として再現しうる（3）を除いて、情報の背景化を行う、と考える。すなわち発話者水準から表現者水準への抽象過程を観察するならば、不定人称者水準から第一人称者水準への具体化過程でズームインの際に新たな情報が加わるのとは逆に、ズームアウトによって発話場面に固有の非言語情報（1）（2）の背景化が生じる、とする。同時に、前景化される情報のほうは、前後の文脈と呼応した表現意図との関わりを深めるものとなり、本稿においては「話し手の視点で意味分析を行うベースとなる意味」すなわち叙述内容を担う。

叙述内容を中心にすえて意味分析を行うことは、現象素論において現象素枠内の情報の増減を考察する場合に、発話者水準への移行は情報の増加（ズームイン）を、第一人称者水準へ、更に不定人称者水準への移行は情

命令表現内における文法構造の役割分担

報の減少（ズームアウト）を観察者が追体験することになる。この双方向から行う意味分析は、生成文法がモジュールとする辞書部門、文法部門、音声部門を表層への出力方向にたどる方策でもあり、同時に語用論（関係性理論を含む）が発話行為の実態から言語の伝達機能を解明する方向を表層から深層にむかってたどる方策でもある。本稿では、言語の運用能力がさまざまな要因によって支えられていることを認め、いたずらに理論的整合性を重視し、一方向（具体から抽象へ、または抽象から具体へ）に向かう分析を試みる方法は採用しない。4つの表現水準を定め、おのおのの静的スケールとして言語形式とその（字義的）意味を想定し、おのおのの水準での言語行為主体者に能力を付与してきたが、ここで4つの表現水準各々において初めて成立する言語形式名を【表1】にまとめておく。

【表1】²⁰（*については注16を参照）

表現水準	典型的言語形式	意味単位	表現水準別示差的意味
発話者水準	発話文（群）	伝達内容	能力推定特徴*
表現者水準	構文（群）	叙述内容	構文特徴*
第一人称者水準	統合型（群）	統合意義	統合特徴
不定人称者水準	単語、単語連結	意義素	語義的意義特徴

また、【表1】における言語形式とそれが相互に組み合わさった文法形式が想起する、＜言語外情報をも組織化した情報の範囲＞をあらわす名称を、【表2】にまとめておく。

【表2】

言語行為者／典型的言語形式	情報組織	表現水準別示差的情報
発話者 ／発話文（群）	発話素、 発話素枠	伝達意図・聞き手・推定情報 発話場面・発話時点
表現者 ／構文（群）	構文素、 構文素枠	表現意図・相手・述定 叙述場面・叙述時点
第一人称者 ／統合型（群）	現象素枠	呼応特徴

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

不定人称者 ／単語、単語連結	現象素	語義的優先特徴
-------------------	-----	---------

典型的言語形式（発話文（群）を除き）は【表1】のごとく、それぞれの表現水準において横の関係すなわち静的体系を構築する。同時にまた、個々の言語形式が発話行為として運用され、言語外の情報をも担う場合には、【表2】のごとく、言語行為者がそれぞれの能力に応じて組織化された情報どおしをズームイン（具体化）させたり、ズームアウト（抽象化）させて、最終的には「発話者水準の情報」として機能できるようにする。例えば、ある表現意図を想起する構文を、その構文を用いるにふさわしくないと言われる発話場面で用いた場合には、話し手が聞き手に対して表現しようとする＜皮肉、隠蔽、挑発＞などの本来潜在的な伝達意図を、明示的に表現することになる。なお、本稿は、話し手が聞き手の解釈能力を推定して言語を用いる（「能力推定情報」を常に有する）ことを認めるものであるが、話し手が聞き手に自分の真意を見抜かれたくない、という伝達意図をもって発話行動をおこすことも認めるものである。

表現者水準の構文を意味分析のベースとする本稿では、当然のことながら、その潜在的伝達意図が正確に伝わるかどうか、および聞き手がそれを解釈しうるためのプロセスは、考察の対象外のこととする。

4. 命令表現の定義

3. 3項で述べたように、本稿は表現者水準における文の意味「叙述内容」を意味分析のベースとして扱うので、まず命令文の意味分析を行うにあたり、考察対象とする＜命令文の言語形式としての範囲＞を限定する。

3. 3項の考察に従い、本稿では、「表現者により、自らの表現意図が表現され終わったと意識される最小の（＝最小の統合型群）言語形式」であり、かつ「同一言語社会の成員が表現者として、某表現意図の表現形式として典型・周辺を区別することのできる言語形式」を「構文」と呼ぶ。

命令表現内における文法構造の役割分担

構文を構築する表現者は不定人称者、第一人称者と比べて、より具体的な情報を認知でき、「みずからの表現したい内容（表現意図）を自覚」するとともに、「表現意図が伝わるように言い定める（述定する）人格」である。この表現者の定義に基づき、本稿では「命令表現」を「表現者が『自分の思う通りに発話場面の状況を変化させたい、という意識』（表現意図）を自覚し、それを言い定めよう（述定）する構文」と定義する。

したがって、本稿で扱う命令表現は「場面・文脈を捨象しても、表現者の命令の意志を表現できる言語形式」に限られることになる。この制限を設けることは例えば、関連性理論が指摘している「命令文の形式と要望という命題態度の相関関係は、必ずしも維持されないことがある（例：道を聞かれて答える場面で用いる命令表現は、情報提供をするのみであり、命令の意図は含まれない。）」²¹という考察の視点を無視することになる。関係性理論が提示した＜命令文の定義＞は簡約すれば以下のようなになる。

「要請型の発話行為はある状況を話し手の観点から望ましいものとして表すもので、他方、助言型の発話行為はある状況を聞き手の観点から望ましいものとして表すものである。」²²

その定義は語用論本来の視点からみると、話し手が発話行為と同時に行う「聞き手の理解能力に対する推定」を、文が表す意味（発話素）に必要な不可欠の情報として扱う点で、発話行為論の理論より精緻さを増しているといえる。²³しかしながら、本稿は静的体系を有する言語形式を話し手が用いるときに生じる言語運用の動的体系を明らかにしようとするものであり、言語形式をまず同定したうえでの立論をはかるものである。

そこで、日本語の命令構文としては命令活用形、中国語命令構文としては“形容詞＋一点”“(主語無し)はだかの動詞”の形式、というように、リストアップできる成員の限られた構文型グループをとりあげる。

一方、この表現者は話し手と異なり、聞き手を含めた発話場面の状況情報や言語外の伝達手段による表象を情報源として加味していく能力がない²⁴。しかしながら、構文が想起する情報の範囲を示す現象素粋「構文素」が含む情報は、第一人称者水準の統合型群に留まったままで構文にま

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

で整えられていない言語形式が想起する現象素枠に比べた場合には、言語形式によって表示された〈時空情報〉を加えることができる。この時空情報を、本稿では〈基準点〉の区別に基づき、二種類に分ける。

(1) 叙述時空：構文内に言語形式として現れている。²⁵

(2) 文脈時空：当該構文の前後に言語形式として現れている。

時空を表す言語形式が、構文内にも前後の文脈にも存在しない場合には、発話者水準における「発話時点」「発話地点」が、表現者水準においても背景情報として表現されていると考える。²⁶

4. 日本語形容詞を用いた命令構文型

最初に、連用修飾統合型内の修飾語項として形容詞が補填され、被修飾語項として「命令構文型を構成する動詞活用形」が補填されて表現された、命令構文型の意味について考察する。

本稿で考察する命令構文型は以下の3種類である。

<1>形容詞連用形の連続型— 空動詞（修飾語項未補填）

<2>形容詞連用形+代動詞シロ

<3>形容詞連用形+動詞命令活用形

最初に、3種の構文型に共通する、第一人称者水準における（統合型としての）統合意義特徴が誘導している現象素操作について述べておく。

【4-1】形容詞と動詞で構成する連用修飾統合型の共通統合意義特徴：

形容詞の語義²⁷が想起する現象素（形容詞現象素）は、動詞が想起する現象素（動詞現象素）のなかの流相または異相にズームインして、現象素焦点²⁸を作る。

4. 1 形容詞命令構文型<1>連用形の連続型

【4-2】形容詞連用形の連続型と空動詞²⁹が構成する統合意義特徴の弁別的特徴：

命令表現内における文法構造の役割分担

被修飾語項になるはずであった動詞を「背景である発話レベルからの関連情報を取り込んで特定化完了」と捉えると同時に言語形式化の過程を中断する。すなわち、動詞が想起するはずであった焦点現象素を現象素枠構成素からはずすことになり、空になった現象素枠域はズームインさせた形容詞の現象素のみで埋められる。その結果、成立した現象素枠域は詳述焦点（注5参照）の意味のみを形式として表現することになり、さらに繰り返し、同じ現象素焦点へズームインを行うことは伝達効果（のうち印象づけ）の強化を意図する表現行為である。

つぎに、この命令構文型<1>が表示する伝達効果を他の構文型と対比しつつ、各構文特徴を考察していく。

【表3】修飾語項を形容詞とする命令構文型<1><2><3>

非修飾語項	<1> 動作情報 = 関連情報	<2> 動作情報 = 情報指定	<3> 動作情報 = 意義素指定
ズームイン先	ゼロ	代動詞「シロ」	具体的動作動詞（典型）
変化：速度（流相）	速く速く！	速くシロ！	速く歩け！速く回せ！
（平相）	速く速く！	速くシロ！	速く始めろ！
態度：弱度（流相）	優しく優しく！	? 文体の共起制限	優しくなせろ！
（平相）	優しく優しく！	? 文体の共起制限	優しく話しかけろ！
出力：強度（流相）	強く強く！	? 過度の曖昧さ	強く押せ！
: 大きさ/小ささ	大きく大きく！	/	大きく/小さく回れ！
動線（流相）	小さく小さく！		（ダンス集団レッスン）
形状（異相）		大きくシロ！	大きく/小さく作れ！
: 長さ/短さ	長く長く！	/	長く伸ばして！短く切っ
時間経過（流相）	短く短く！		て！（歌のレッスン）
形状（異相）		長く/短くシロ！	長く伸ばせ！短く切れ！ （麺打ち）

注：副詞「もっと」をつければ、ズームイン先はすべて（流相）になる。

したがって、本稿の日本語調査では強化の副詞は用いない。

4. 2 形容詞命令構文型<3>

まず、動作動詞がともに用いられた最も使用頻度が高い、プロトタイプとみなしうる構文型<3>の文法的特徴およびその想起する現象素枠内の情報構造には次の特徴が認められる。

(特徴3-1) 動詞が固有の出来事を表すものである場合、意義素内の意味的事項ごとに決定する意義特徴の数が他の<1><2>に比べて多くなる。意義特徴の数を増やす(現象素内の情報を増やすこと)と、現象素枠域の広さが小さくなること(以後、「現象の特定化」と呼ぶ)は平行して生じる意味的変容である³⁰。命令表現の場合も具体的動詞を用いる場合は、語義的呼応条件さえ整えれば形容詞の現象素がズームインしていく先の動詞のアクションツァルト内の位置まで詳しく指定でき、その現象素枠域が<1><2>に比べて小さくなる。

本稿では「構文素枠域が小さい」という特徴を、命令という表現意図を明確に伝えるための必要条件とみなす。特に動詞の命令活用形式を用いた場合には、文脈・場面に依存せずに表現意図の曖昧性が除去された構文型であり、本稿では「文脈フリー」の構文型と呼ぶことにする。

例えば、【表4】の如く、<1><2>の修飾構造では用いられない形容詞も、<3>では用いられる。つまり表現意図が文脈フリーで表現されると、詳述のために用いる言語形式との共起制限が緩やかになる。

【表4】<+>は付加することで統合を促進できる情報

認知対象 修飾統合型	I 動作情報無規定	II 動作情報不特定	III 動作情報特定
	連呼形式		代動詞「シロ」
人間関係についての態度を指定		<+もっと> <+もっと?>	厳しく取り締まれ、 冷たく突き放せ
行為に伴って生じる知覚感覚を指定		<+感覚部位> <+期間>	暖かく着込め ゆっくり休め
行為に対する評価を指定			賢く振舞え うまく処理しろ

命令表現内における文法構造の役割分担

注：＜＋＞統合を促進できる情報を加えた表現

もっと厳しくシロ， もっと冷たくシロ？

背中を暖かくシロ， 三日間ゆっくりシロ

自然言語の構文型の意味（構文素）を比較する場合、本稿のこれまでの意味記述の方針によれば、当然のことながら表現者水準における「特定の表現意図を表示する構文型」の用例を考察せねばならない。したがって、中国語と日本語の命令表現を比較する場合、中国語においても日本語の命令構文型＜3＞に相当する構文型を扱うことになる。

4. 3 形容詞命令構文型＜2＞

具体的な動作に関する語義的意義特徴を含まない動詞「スル」の命令形で被修飾語項を補填し、かつ、形容詞連用形を修飾語項に補填した場合、統合特徴によって（動作に関する情報がなくとも）統合型は成立する。しかし、形容詞現象素のズームイン先として「スル」のアクションツァルトのどこかを指定することはできない。その現象素焦点は複合動詞の想起するものを同様、一つのアクションツァルトを構成するからである。

本稿では複合動詞「形容詞（～～ku）スル」について、その意義素を「形容詞の意義素が要求する判断対象・描写対象の形状または様態が、動作中または動作前に、動作主によって意図されたり目的とされたりする」と記述する。本稿でいうところの「意図」は、動作行為を行う仕方についての目論見を指し、「目的」は、動作行為が生じる結果に対する目論見・期待を指すことにする。

シロをつけて構成した命令構文には【表3】のほかに【表5】などが挙げられる。ただし、いずれも複合動詞として＜発語の辞＞として使えるか否かのみを検討してある。副詞「もっと」を前置した場合ははじめ、文脈的意味によって代動詞「シロ」が代置する動作が容易に文脈から選択・特定される用例は、考察対象から除外しておく。

また、同種の意味領域に属する形容詞であり、かつ代動詞シロをつけたの

金沢大学中国語学中国文学教室紀要第八輯

では不自然な命令形しか作れなくても、特定の動作動詞と語義的意義特徴の呼応関係がより密であれば成立する表現を【表5】のなかへ併記する。

【表5】

命令（状態指定）の焦点	シロを付けて複合動詞命令形になる	動作動詞をつけると命令形になる
(1) 動作の結果生じたモノの様態・形状	「～を」黒く、柔らかく、甘く、	(すべて成立)
(2) 動作の結果生じたモノの計測値	「～を」熱く、大きく、広く、	高く積み、深く刻め、
(3) 移動に伴う計測値	(動きを) 速く、	高く飛べ、深くもぐれ、

注：(2) (3) の「計測値」に関する言語形式上のマーク＝数量と度量衡を表す表現（3センチ・1平米・3秒など）を修飾語項に補填できる。

5. おわりに

前稿、本稿と続けて、意義素論と現象素論を一体化して意味分析を行う方法を系統化してきた。次稿では、その系統的方法を駆使して、日本語と中国語の命令構文型を形式と意味（統合意義、表現意図、発話意図）両面から比較対照を行う。

¹ 関連情報は特定の言語形式の意義素とは対応関係を持たない情報であるにも関わらず、意義素論における「語義的呼応の原則」が成立するか成立しないかを決定づける。すなわち「ある特定の統合型内（または構文内）における共起制限を左右する、当該統合型外（または当該構文外）の情報」のことである。このような関連情報は、意義素を静的かつ体系的に構成している意義特徴を用いて記述することはできない。当該言語形式が実際に用いられるたびに、発話場面の状況や前後の文脈によって、毎回異なるからである。したがって、同一統合型内や構文内における関連情報による「(二項の意義素または統合意義) 関連づけ」の定義は、関連性理論における「関連」が意味する「言語表現の意味には『話し手と聞き手双方の解釈』が不可避的な関連を有して文意（本稿の「発話者水準にある情報＝発話素」にあたる）に含まれる」という概念とは根本的に異なるものである。言い換

命令表現内における文法構造の役割分担

えるならば本稿の関連情報には、3段階の表現水準（第一人称者水準・表現者水準・発話者水準）毎に、おのおの統合型群・構文群・発話群の文脈・場面から当該現象素・構文素・発話素へ流入する、という水準差がある。

- 2 「関連情報の流入」に類似した発想は以下の研究者によって記されている。すなわち、ターミーは一つの言語表現についてプロフィールされた経緯のほかに、「起因／様態」を認め、ラネカーは事態の参与者のほかに話者の視点による「セッティング」を認めている。

Talmy, L. 1985. "Lexical patterns": semantic structures in lexical forms
Language typology and syntactic description 3 Cambridge UP
Langacker, R. W. 1990 "Settings, Participants, and Grammatical Relations
Concept, Image, and Grammatical Relations: Mouton de Gruyter

- 3 前稿の注釈より一部引用：筆者は服部の提案した人格者の3種の名称（筆者の命名を一つ付け加える）と表現水準の4段階を次のように対応させる。
服部四郎 1957 「ソシュールの langue と言語過程説」『言語研究』32号
日本言語学会

不定人称者＝「事柄」を認定する能力・視点の所有者。個々の発話行動ではなく、個々の言語形式（単語またはフレーズから成る語義的単位）にのみ現れる固有の仮想の社会的人格。（大瀧による命名）

第一人称者＝統合型が構成する「出来事」の認定能力を有する。

表現者＝文単位の重層統合型が構成する「事実」の認定能力を有する。

話し手＝文統合が構成する「現実」の認定能力とともに、発語内行為の遂行能力を有する。現象素内の関連情報操作を行える唯一の人格。

- 4 統合型群は、最小統合型を入れ子式に積み重ねていくことで成立する。統合型が他の統合型の下位に位置していく、即ち他の統合型が要求している格または格的要素を補填していくことを「充足」と名づけて、単独の格補填とは区別する。充足は、一定の順序でおこなわれる。
- 5 構文文法が指摘する構文ネットワークの概念に類似する。本稿のいう統合特徴の静的体系と構文ネットワークの相違点は、構文の意義を構成する下位要素として「最小統合型の統合意義特徴」を設定し、かつ構文意義内に組織的構造を見出すことによりネットワーク記述の細密化を図ろうとする点にある。

Adele. E. Goldberg. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. : Chicago UP

（『構文文法論』訳：河上誓作ほか 研究者出版 2001）

- 6 前稿 P5 「最小統合型の現象素枠表記原則」
- 7 国広哲弥氏が現象素論で用いている呼び名「認知焦点」（前稿でも使用）は、「格または格的要素を補填する名詞」の現象素がズームインされる位置に限定して使用する。
- 8 前稿 P6 「統合型の現象素枠重層原則 II」
- 9 修飾統合型において「被修飾語項に位置する言語形式」が想起する現象素は前景現象素であるにも関わらず、認知焦点へ現象素をズームインさせる

ことはない。しかし、同一統合型内の「修飾語項に位置する言語形式」の現象素がズームイン先となる位置には新たに情報の重複が生じ、その位置を「現象素焦点」と呼ぶことにする。

- ¹⁰ いわゆる主述統合型と連体修飾統合型では、同じ形容詞と名詞の組み合わせが受ける共起制限に差があることが確かめられている。

形容詞

大滝幸子

- ¹¹ 認知焦点は格または格的要素への情報を有限枠でくくったものである。平相では「動作主」「経験者」「原因物」、流相では「対象」「道具」「共役者」、異相では「生産物」などが含まれる。

- ¹² Langacker, R.W. 1990. (前掲書注2参照)

参与者 participant の背景・場における位置は現象素内の認知焦点と基本的に一致する。

Croft, W. 1990. *Typology and universal*: Cambridge UP

事態に三段階の分節をつける点は、現象素(枠)内の平相・流相・異相と一致するが、解釈としての「使役 cause 変化 become 状態 state」という意味づけされた分節は設定しない。また、本稿の相分節では、意志・行為・移動も分節内情報にすぎず、分節全体の機能を示すものではない。

- ¹³ 統合型群は、文としての伝達機能と切り離されている点で、構文文法における構文の概念に類似する。ただし、統合型群が最小統合型の重層によって構成されているとする点、また統合型群の成立要件は構文の成立要件の定め方とは異なっている。

Goldberg, A. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Chicago U.P.

(河上誓作ほか訳『構文文法論』研究社 2001)

- ¹⁴ 服部四郎 1968年「意味の分析」『英語基礎語彙の研究』三省堂

「発話」(utterance)とは話しをするという出来事(speech-event)の単位である。それは、発話者が話し始めるときに始まり、彼がその行動を終わって沈黙するか、あるいは話すこと意外の行動に移るときに終わる。

日本語の発話、たとえば、いろいろの話し手の発する『この本、あなたの方?』という発話は、いずれも互いに異なる。しかし、それらは、同じ日本語言語共同体のすべての話し手によって要点は同じだと認められるから、ある共通の特徴をもっているものと想定される。このような場合に、これらの発話は、「コノ ホン アナタ・ノ?」という同じ「言語作品」(linguistic production)に該当(correspond)する、と言う。

言語作品は一つ、あるいはそれ以上の「文」(sentence)より成る。文はその末尾を示す音調(intonation)を持っており、文に該当する発話または発話断片は音休止(pause)によってその前後を限られるのが常である。

統合型とは、一つの文のシンタクスの構成(syntactic construction)のことである。一単語から成る文の場合でも、一つの成分だけからなる統合型を想定すべきである。

命令表現内における文法構造の役割分担

したがって、一つの文の意義は、音調の意義と、統合型の意義と、含まれている諸単語の意義素とから成り、それに文脈的意義がしばしば加わる。もし強調の型 (emphasisi -patten) を文の要素とみるならば、強調の意義もこの中に加えなければならない。

15 生の会話資料を分析する単位である「ターン」についての研究では、話し手と聞き手の交代時期が形式だけでは決定できないことが指摘されている。しかし「モノログ」や「文章」の区切りは形式で見分けられる。

16 D.Sperber & D.Wilson (Second E.)1995.*Relevance* Blackwell
 (『関連性理論』内田聖二他訳, 研究社出版)

17 前掲書 (注 16) 原書 p 260、翻訳 p318

第二版では関連性の原則を一つに絞ってあった初版へ訂正を加えている。『関連性の原則は、1つではなく2つある。ひとつは認知に関するもの、もうひとつは伝達に関するものである。

(1) 人間の認知は、関連性が最大になるようにできている。

(2) すべての意図明示的伝達行為は、それ自身の最適の関連性の見込みを伝達する。』

本稿の仮定する4つの表現水準で最も現実的存在である発話者水準では、話し手は発話者としての伝達意図を、この認知の原則に自然にしたがい、意識的に伝達原則を利用することによって表現する、と仮定する。

18 前掲書 (注 16) 原書 p 230、翻訳 p282

19 前掲書 (注 16) 原書 p232 「Figure 3」、翻訳 p283 図 3

20 発話者水準での「観察推定」は解釈能力と発話場面についての情報取得能力である。言語形式からは対応関係をもたず、聞き手の認知能力が発揮される一形態である。しかし、表現者水準における聞き手との関係を表す構文特徴 (待遇) 発話場面の発話時点との比較対照 (時制) は言語形式と対応関係を有する。また、表現者水準における構文特徴については構文文法の主張する「文法構造間の静的体系」を構成するものとする。

21 前掲書 (注 16) 原書 p250、翻訳 p 307

22 前掲書 (注 16)

23 今井邦彦『語用論への招待』2001 大修館書店

「(113) ある状況を話し手が潜在的であり (まだ実現していないが潜在的には実現しうる状況) かつ望ましいと考えている旨を表示したもの」 p91

「望ましい」というのは誰かにとって望ましいわけであるが、(中略) 誰であるかは命令文自体には表現されていない」 p91

24 「最小統合型の現象素枠表記原則」第一人称者の視点 (前稿 P5)

「現象素枠重層原則 I・II」 (前稿 p6)

25 文型内に名詞“今”が含まれていても、それは表現水準レベルの現在であり、幅があり、かつ場面情報を含まない。発話時点を指してはいない。

26 前稿 P6「統合型の現象素枠重層原則 I」

27 形容詞が感情形容詞の場合は、つねに「有意思の生命体についての情報が認知焦点に求められる」という大きな特徴があるため、同一に扱えない。

-
- 統合型内で共起する言語形式にその語義的意義特徴が存在しない場合には、関連情報を得て認知焦点を補填するために、統合型群を作る必要が生じる。
- 28 修飾統合型による情報のズームインを経て成立した、もともと複数の現象素によって構成された二重の現象素焦点を意味する。(注9(1)参照)
- 29 「空動詞」が表す意味は、「本来、動詞が挿入されているべき統合型の項に動詞が存在しない場合、その<空>にされたままの項」のこととする。省略という表現は発話意図やコンテクストとの関連が含まれることとなり、また、生成文法における **empty** は概念的には近いものの痕跡を主旨とし、かつ、その位置に存在した言語形式の情報が含まれていない。
- 30 比例関係として量化できないまでも、やがてその相関関係が文法構造、語彙の種類に基づいて計量できる可能性が指摘されている。